

2022年度

総合型選抜Ⅲ アジア事情探究型

適性検査

一

次の文章を読んで、後の問い（問1〜7）に答えなさい。

現代の日本人は、近代以前の人々の持たなかった多くの能力を身につけている。第一に、ほとんど百パーセントの人が自由なく読み書きができる。^(a) 文盲という語は、日本では今や死語になった。加えて、外国語の能力や科学知識などでは、近代以前とは全く比べものにならない。

ただ、その反面で、現代人が失ってしまったものも少なくない。その一つに書写能力の低下がある。特別に書を習っている人はともかく、平均的な日本人の書く文字は、明らかに近代以前の人に劣っている。

そのことを⁽¹⁾ ツウカンしたのは、四年前、京都国立博物館の館長を務めていたときに開催した新選組の展覧会を見てからだった。そこには、隊長近藤勇や副隊長土方歳三をはじめとする隊員たちの書状が数多く展示されていたのだが、どれを見ても、今の平均的日本人の到底及ぶところではない。近藤や土方は武蔵の国の農家の出で、幕末の特殊事情から武士の身分を得た人であり、特に深い教養があったわけでもない。だが、格別の達筆とはいえないまでも、近藤が自作の詩を書いた軸の前に立つと、見る者に強く訴えてくる迫力がある。（中略）

今どきは、ちよつとした用件はメールですませてしまうから、手紙をもらう機会はとみに少なくなった。たまにもらう手紙もワープロ打ち出しが多くなり、手書きの手紙はさらに減少した。年賀状などで、文面はもちろん、宛名までワープロ打ちのものを受け取ると、正直にいつてあまり^(b) シンミな感じがしない。つまり書き手不在の、機械文字なのである。もはや手書き文字の^(b) 巧拙をいうような時代ではなくなったのか（何を隠そう、実は私のこの文章もパソコンで書いているのだが、こうした原稿はともかく、⁽¹⁾ 私信だけは努めて手書きの文字にするよう、意固地にこだわっている）。

ワープロ打ちの手紙より、たとえ悪筆で読みにくい字で書かれていても、肉筆の手紙をもらったときの方が、相手の存在

を身近に感ずるのはなぜだろう。文字は単なる意思伝達的手段ではなく、近藤勇や坂本龍馬の書状のように、文字の綴られる形や姿そのものが、書き手の人格をにじませているからだろう。その意味で、まさに「書は人なり」である。

明治以降、人が毛筆を執る機会は激減した。プロの物書きだって、「執筆」といえば、せいぜい万年筆を執って書くのが普通だった。ただ、毛筆にせよ、万年筆にせよ、日常生活の中で書くことは欠かせない。もちろん万年筆の文字にだって個性はあるから、著名な作家の直筆原稿が発見されると、相当な価格で取引される。いま万年筆で原稿を書く作家がいないとはいわないまでも、確実に減っていることは確かである。ワープロ打ちの原稿では、古書市で興味を示す人は誰もいないだろう。

今やまさに没個性の A が天下を ^(c) 席卷しているが、それによって大きく局面が変わった問題がある。漢字の問題である。

アルファベットですべてがまかなえる欧米人と違って、日本人の書く文字には漢字が大きな割合を占める。固有の文字を持たなかった古代日本人は、言語系統の全く異なる中国の漢字を取り入れて、かな文字をそこから創作するなどの工夫を加えながら、独自の国語表記法を編み出したのだが、近代以後、中国が唯一絶対の基準であった時期が過去のものとなって、欧米の文化を大量に受容するようになると、漢字は一面で ^(h) シダイに日本人の手に余るようになってきた。ことに第二次大戦後の社会では、漢字への拒否反応が著しくなる。

戦後しばらくの間は、漢字にとって危機の時代だった。当用漢字によって使用できる字数は制限され、さらには漢字無用論さえあった。いずれ将来は、日本語の表記を全くかな文字あるいはローマ字で統一すべきだという意見も強かった。漢字の本家中国では、一九四九年の人民共和國誕生後、⁽²⁾ 漢字が近代化を妨げる大きな要因になっているという認識が国の政策の中で定着し、とりあえずは字面を省略した簡体字を普及させ、将来は「拼音」^{ピンイン} という ^(d) 音標化された文字による統一を

目ざす文字改革が積極的に進められた。

漢字のしくみの複雑さ、筆画の多さが、漢字が(二)ケイエンされた原因だが、二十世紀も残り少なくなったところに、パソコンという(e)至便の(ホ)リキが普及してから、漢字はようやく命拾いをした。これは日本も中国も同じ事情である。今や、日本でも中国でも、漢字を放棄しようという意見は、すっかり声を潜めた。パソコンさえあれば、自分で書けない文字でも、キーの操作一つで、機械が自由に変換してくれる。おまけにきちんとした印刷の字体で文が綴れる。もう下手な字を気に病むこともなくなった。万歳！

パソコンは漢字の救世主である。だが、それにはおのずと裏がある。パソコンの持つワープロ機能のお陰で、難しい漢字も難なく処理できるようになったが、機械任せのつけは、たちまち人にはね返ってきた。漢字には筆順があつて、一字一字にどこから起筆してどこで収めるといふ順序があるのだが、パソコンはそうしたB、いきなり完結した字体を出してくる。だから、受け手としては、機械の出した答えを単純に受け取って、それを自分のものにするほかはない。とにかく自分で筆を執らないのだから、いちいちの文字の書き方について責任は持てない。どこから書こうが、ちゃんとした文字になってさえいりゃあ、それで文句はあるめえ、ということになりかねない。(3)漢字を書く能力の衰退はそこから始まる。

いま起こっている日本語の混乱、ことに漢字の書写に関するそれは、こうしたパソコンの功罪によるところが大きい。日本人が将来にわたって漢字を自国語の中で使いつづけるとすれば、パソコンと上手につきあいながら、いかに漢字固有の機能を保持してゆくかが最大の課題となるだろう。

(興膳宏『中国古典と現代』による)

問1 傍線部 (a) (e) の漢字を平仮名にしなさい。

(a) 文盲

(b) 巧拙

(c) 席卷

(配点 10点)

(d) 音標

(e) 至便

問2 波線部 (イ) (ホ) の片仮名を漢字にしなさい。

(イ) ツウカン

(ロ) シンミ

(ハ) シダイ

(配点 10点)

(ニ) ケイエン

(ホ) リキ

問3 空欄Aには文中の四字の言葉が入る。それは何か。

(配点5点)

問4 空欄Bを補うのに最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

(配点4点)

- ① キーの操作とは全く無関係に
- ② 考慮を変換の際に取り込んで
- ③ 途中経過には一切おかまいなく
- ④ 漢字固有の機能を保持しながら
- ⑤ 自由な変換を逆手にとりながら

二

次の文章を読んで、後の問い（問1〜8）に答えなさい。

明朝から中国の統治をバトンタッチした清朝の時代、とりわけ一八世紀には、中国のみならず東アジア全域の統合・平和が成し遂げられたかのようにみえました。しかしヨーロッパの近代が加速してアジアへの進出を本格化させると、中国社会の多元構造はいっそう深刻かつ鮮明になりました。在地の勢力はいよいよ増大して、「小さな政府」で在地在来に^(a)委ねる清朝的な統治方法では、けつきよく産業革命以後の近代に対応し切れなかったのです。中国の一九世紀は、内憂外患の時代になりました。

そこで苦闘したあげくにめざした解が、近代を席卷したヨーロッパの近代国家やそれを見習った日本をモデルとする「国民国家」の形成です。そもそも国民国家は単一構造的な社会だからこそ生まれたシステムであり、多元的な中国社会にはそぐわないはずです。しかし、グローバル化した世界を生き残るには、それしか方法がないと考えたわけです。ここに、今日も続く中国の混迷と苦悩の出発点があります。

清朝は⁽¹⁾辛亥革命によって倒れ、中華民国が誕生します。英米と深く関わっていました。また第二次大戦後には、毛沢東が率いる中国共産党が中華人民共和国を樹立します。こちらはソ連・共産主義とコミットしていますから、ベクトルはまったく逆のようにも思えますが、実は「国民国家をつくる」という目標を掲げた点では共通しています。あくまでも国民国家をつくって、西洋や日本に対抗するための取り組みが中国の「革命」であったわけです。

ところがその「革命」・国民国家形成というイデオロギーと、歴史的に多元性をきわめてきた現実の間には、容易に埋められない深いギャップがあります。だから、埋まるまで永遠に「革命」を続けなければいけない。それが、今日の中国の姿でしよう。

たとえば中国政府は、かねてより「一つの中国」というスローガンを政策的立場として掲げています。(b)国是といつていかと思いますが、中国大陸のみならず、台湾も香港もマカオもすべて統一国家中国の支配下にある、というわけです。

しかし、これほど欺瞞に満ちた言葉はないでしょう。現実として中国は複数の民族問題、国境問題も抱えています。

たとえば民族問題でいえば、中国が「領土主権」・帰属を主張し、チベットが「高度な自治」を求めて、対立を続けている。「チベット問題」は、解決の気配すらありません。また先日も、新疆ウイグル自治区の住民「数十万」人が、中国当局によつて強制収容所に送られたと報じられて、われわれに衝撃を与えました。中国政府の側にも相応の言い分はあると思いますが、とにかく無理をして押さえつけている印象が拭えません。

国境問題にしても、日本との尖閣諸島問題のみならず、ベトナムとは南沙諸島問題があり、さらにインドやパキスタンとも、国境をめぐる対立が続いています。

あるいは香港とマカオには、「一国二制度」を導入しています。これはもともと台湾との統一を前提として構想したのですが、その前にイギリスから返還された香港で導入されました。ところが、不十分な「民主化」とそれに反発する住民との衝突など、やはり矛盾が噴出しています。二〇一四年に起きた「雨傘革命」と呼ばれる大規模な暴動は、まだ記憶に新しいところですよ。

そもそも「一国二制度」というものを制定する必要に迫られること自体、1、ということを自ら表明しているようなものです。しかも国民国家の場合、政府権力が機能していることを内外にアピールする必要があるため、制度は違っても統制の圧力は強いままです。このあたりの齟齬が人々の不満に転化し、大暴動につながったのでしよう。

この制度は今の中国の問題であると同時に、多元的で地域ごとに習俗・慣行がまったく違うため、統治の仕方も違つていたという中国の歴史を反映しています。しかもその境界線も曖昧なことが、統治をいつそう複雑にさせています。歴史的な

多元性を国民国家というパッケージで一つにまとめることができるのか。「革命」が始動してから今なお抱え続けている中国の大きな課題なのです。

(2) 当然ながら、台湾も「一国二制度」には注意を払い、警戒しています。大陸が敵視し、経済の低迷を招いている現在の蔡英文政権を生み出した原動力でもありません。

また中国の社会構造の複雑さは、経済体制をみるだけでも明らかです。国家としては共産党による一党独裁を堅持しながら、経済は鄧小平の時代から市場経済を志向しています。かつて毛沢東は名実ともに「一つの中国」を志向し、上から下まですべて社会主義・計画経済で運営しようとしたが、大失敗に終わりました。そこで民間社会における多元性の存在と作用を認め、「社会主義市場経済」という体制を導入したわけです。

その結果、中国は急速な経済成長を遂げてきました。しかし、さまざまな軋みも生じています。まして経済が減速傾向にある昨今、いかに軟着陸させるかは、習近平政権にとって、喫緊の課題だと思っています。

ここでも共通する問題は、歴史的な多元性と「一つの中国」との相剋です。(3) 現実とイデオロギーのギャップと言い換えることもできるでしょう。その乖離はきわめて大きいのですが、それは今に始まった話ではありません。本書でみてきたような歴史的経緯を考えるなら、そもそも相剋せざるを得ない構造になっているのです。

逆にいうと、歴史をみなければ今の中国が置かれている立場と境遇はわからないということでもあります。

実は多元的な社会の一つにまとめようとする試みは、中国史のみならず、程度の差はありますが、アジア史・東洋史にも少なからずみられます。そのプロセスで生まれる軋轢をどう処理するかが、それぞれの歴史の要諦でした。(d)

その手段として用いられたのが、宗教です。だいたい世界三大宗教と呼ばれるイスラーム、キリスト教、仏教は、いずれもアジア発祥です。それはおそらく、多元性をまとめるための普遍性やイデオロギー、あるいは秩序体系を提供することが、

アジアの全史を貫く課題だったからでしょう。

それも一つの宗教・信仰に限定したわけではありません。一人の君主が複数の宗教を奨励、信奉し、同じ場所に暮らすそれぞれの宗教の信者をつなぎ止めて、共存させるといったこともありました。アジア各地では宗教というA的なものも、B的に存在していたのです。そうであるなら、複数の宗教・C性を重層化させることでしか、D共存を可能とする統一的な体制は保てなかったわけです。

言い換えるなら、アジア史において政教分離は成立しにくいということです。E性の強い社会で安定した体制を存続させるには、宗教のようなF性を有するものがどうしても欠かせません。複数のG性を重層させねばならない場合は、なおさらです。

ヨーロッパで政教分離が成立したのは、そもそも社会も信仰も単一均質構造でまとまっていたからです。分離しても社会が解体、分裂しない確信が、その背後に厳存しています。仮にアジアで政教分離を実施したら、たちまち体制や秩序はバラバラになって混乱をもたらしてしまっただけでしょう。

中国の場合も、統合の象徴として儒教・朱子学が用意されました。ところが儒教は、漢人のイデオロギー・普遍性ですので、(4)モンゴル・チベットと共存した清朝では、それだけでは不十分です。儒教の聖人をめざした清朝の皇帝は、同時にチベット仏教にも(e)帰依して、普遍性の重層をはかったのですが、その体制も一八世紀までしか持ちません。

近代以降では、儒教・チベット仏教もろとも、先に述べた「国民国家」や「一つの中国」が代替することになります。同時に、清代の多元共存に代わる秩序と統合のシンボルとして「五族共和」や「中华民族」のようなものがしばしば提起されました。こうして(5)「中华民族の復興」を「中国の夢」とする習近平政権も、はるか古くからの中国史の一コマとしてとらえることができるのです。

(岡本隆司『世界史とつなげて学ぶ中国全史』による)

問1 波線部 (a) (e) の片仮名を漢字にしなさい。

(配点 10点)

(a) 委ねる

(b) 国是

(c) 喫緊

(d) 要諦

(e) 帰依

問2 傍線部 (1) 「辛亥革命」とあるが、この革命を主導し、後に「国父」と尊称された中国の政治家の名前を答えなさい。

(配点 5点)

問 6 空欄 A ～空欄 G には、「普遍」または「多元」の二字が入る。その正しい組み合わせは次の①～⑥のどれなのか、答えなさい。

(配点 5 点)

- | | | | | | | | |
|---|------|------|------|------|------|------|------|
| ① | A 普遍 | B 多元 | C 普遍 | D 多元 | E 多元 | F 普遍 | G 多元 |
| ② | A 普遍 | B 多元 | C 普遍 | D 多元 | E 多元 | F 普遍 | G 普遍 |
| ③ | A 普遍 | B 多元 | C 多元 | D 普遍 | E 普遍 | F 多元 | G 普遍 |
| ④ | A 多元 | B 普遍 | C 多元 | D 多元 | E 普遍 | F 多元 | G 普遍 |
| ⑤ | A 多元 | B 普遍 | C 多元 | D 普遍 | E 普遍 | F 多元 | G 多元 |
| ⑥ | A 多元 | B 普遍 | C 多元 | D 普遍 | E 多元 | F 普遍 | G 多元 |



問 7 傍線部 (4) 「モンゴル・チベットと共存した清朝」は何という民族が建てた王朝か、答えなさい。

(配点 5 点)



